

学年一の美少女を助けるとその美少女に惚れられてしまつた俺はどうすればいいのだろうか？

零菊

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神無月蒼佑は、高校入学式当日に道端に飛び出したヒロインの霜月詩乃を助けた代わ
りに自分が轢かれてしまったが病院にも毎日見舞いに来てくれるそこから始まる恋愛物
語

筆者は初心者です

最後まで書き上げるつもりなので暖かいめで見守ってください

訂正や感想、誤字脱字の報告、応援は筆者のモチベに繋がります！

目

次

高校1年生

プロローグ

第一話 「退院そして説教」

第二話 「登校そして再開」

7 4 1

高校1年生

プロローグ

俺は、神無月蒼佑だ。

今桜舞い散る道を朝早くから一人で学校に向かっている。今日は入学式で、朝早めに家を出た為周りには誰も居なかつた。

学校には、家から駅まで15分、電車に乗つて最寄りの駅20分、駅から学校まで15分かかる、公立 星光高等学校に今日から通う予定だつた。

あんなことが起ることは知らずに……

高校デビューをしようとしており行きの電車の窓で身だしなみを整えて電車を降りた。

「早く家を出すすぎたかな」と俺は周りを見て呟いた。

学校に続く道を歩いていると、反対車線で犬の散歩をしている女子がいた。

それを見ていると犬に女子が車道の方に引っぱられその子が車道に飛び出した。すると横から車が来ていた。

俺は、とつさの判断でその女子の方に走り歩道の方に突き飛ばした。

「え？」とその子は驚いた顔をして泣いていたが俺は、「大丈夫だよ」と言つて目を閉じた。

目を開けると病院のベットで寝ていた。少し顔を上げるとそこには助けた女子が横で寝ていた。

少しばかりその女子に見蕩れていたが「おい…起きろ」と声を掛けると「ふえ…?」と力のない声を出し、俺の顔を見た途端泣き始めた。

「よかつたよ…本当によかつたよ……」と言いつつ抱きついてくるが正直、体が痛い…いや、体に当たる柔らかい物体はすぐよかつたです！けど「痛い…」と声を漏らしてしまった。

その子は「あっ、ごめんね」と言い、顔を赤らめながら体を離した。

うん惜しいことしたなあと俺は心の中で思いはずつと気になつてた事を聞いてみた。

「あのさ…俺の名前は神無月蒼佑だよ。俺の事は、蒼佑と呼んでくれ。ちなみに君の名前は何て言うんだ？」と言うと女子は、「あ…ごめんね、私の名前は、霜月詩乃です。えっと…助けてくれてありがとうございました！あとは、これからよろしくお願ひします！蒼佑君！」

「お…おう、よろしくな」といい俺はそっぽを向いた。

詩乃は、「ふふつ」と笑つて急に思い出したかのようにならう言つた。

「そういえば蒼佑くんは、同じ高校なんだね！再来週から来れるんだよね楽しみにしてるよ！」と天使のような笑顔で言われ、「そうだな、同じ高校なんだな俺も楽しみだよ。」と答えると詩乃は、「そつかあ、あつもう遅いし今日は帰るね、また明日来るね」と言って病室から出ていった。

「明日も来るのかよ」と苦笑いを浮かべてまあいいかと心の中で思いつつまた俺は、瞳を閉じた。

これから俺と詩乃関係が大きく変わることも知らずに……。

第一話 「退院そして説教」

今日で入院して、2週間が経つた日曜日、今日が俺の退院日だ！

俺は別に入院生活は決して嫌いではないが入学した高校に行くことが楽しみだつた。
「早く学校行つてあいつらに会いたいな…」と呟いた。

しかも俺は、両親が仕事のため海外に住んでおり今は妹と二人暮しだ。

妹と詩乃は毎日のようにお見舞いに来てくれる今日は妹が迎えに来てくれるようだ。

ちなみに詩乃は、俺から見てもすごい美少女であり亜麻色の髪色でロングが似合う子
だ：つて俺は誰に説明をしてるのだろう…まあいいかと考えていると「お兄ちゃん」
と思いつきり俺に抱きついてくる妹こと神無月美琴である。

美琴も周囲の人から見てとても美少女である…また誰に説明してるんだろう。

「美琴痛いよ？お兄ちゃん一応退院してすぐだからね？」

「ごめんね、お兄ちゃん：ダメだつた？」と上目遣いで見てきた為俺は、ダメとも言えず
に美琴の好きなようにさせた。

「じゃあ帰るか？」

「うん！」と元気よく言われた為歩き始めた。

「ねえ：お兄ちゃん晩御飯の買い物にスーパーに買い物行こ？」

「ああ…いいぞ！ちなみにメニューはなんだ？」

「メニューはね！お兄ちゃんの好きなハンバーグだよ！」

「おお、それは楽しみだな。「それとお兄ちゃんにはご飯の後に少しお話があります」と

俺の声に重ねるように言つてきた。

表情を見ると笑顔だが目は笑つていなく何故か美琴の後ろにゴゴゴゴゴ…という効果音が聞こえる気がする。

あつこれ美琴が凄い怒つてるやつだ…俺何か怒らせるようなことしたかな？と考えると…もしかして2週間前のことかな？と考えているといつの間にか家に着いており「まあ家に入ろ！」と言われた。

俺は夕食後のことを考えるとすぐ怖く家に入りたくなかつたが、美琴に思いつきり腕を引っ張られ、俺は渋々家に入るのであつた……

……………
夕食後……………

皿などを洗い終わりくつろいでいると美琴が切り出した：「お兄ちゃんはなんであんなことしたの？私すごく心配だった…もしお兄ちゃんが居なくなつたらつて考えたら本当に不安で寝れなかつたんだよ？いつか、取り返しのつかないことになるよ？もつと自分を大事にしてよお……」と美琴は泣きながら言つた。

俺は、少し困ったように美琴の頭を撫でながら「ごめんな、目の前の女の子を助けなきやつて思つたら咄嗟に体が動いたんだよ。でも女の子は助けれたけど美琴を傷つけてしまつたな」

「助けることはいい事だよ！お兄ちゃん頑張ったね…ありがと！戻つてきてくれて」と言われた為俺は照れてしまい「お…おう」と言つて顔を背けた。

何分か沈黙が続いた後「明日学校だから寝るね！お兄ちゃんも明日から学校頑張つてね！おやすみ♪」と言つて部屋に帰つていつた

「俺も明日の準備して寝るか」とソファから腰を上げ自分の部屋に戻つた。

学校の支度が終わると俺はすぐさまベットにダイブしそのまま明日からの学校に備え意識を飛ばした。

1日目からあんなことが起こることは知らずに……

第二話 「登校そして再開」

俺は、再び桜舞い散る道を歩いていると、「おはよう！蒼佑君！」と聞こえたため振り返ると詩乃がいた。

「詩乃おはよう」と言うと驚いたように「今、名前呼び捨てで呼んだ？」と詩乃が小さく呟いたため、「何か言つたか？」

「ううん！なんもないよ」と慌てながら顔を赤らめながら言つてきた。

「蒼佑君！一緒に学校行こ！」と笑顔で言われ、俺はドキッとした。

「まあ…行くくらいならいいぞ…」と言うと詩乃是天使のような笑顔を浮かべ「えへへ…」と横を歩き始めた。

するとどうぞ登校時間だったのだろう。周りの男子からは軽蔑の目を女子からは羨ましそうに見られた。

その中の1人のイケメン君がこっちを向いて向かつて來た。

「やあ詩乃さん、おはよう！急で悪いんだけど今日の昼休み……に来てくれるかい？」と爽やかな笑顔で言つていた。ちなみに俺の方をむくと申し訳なさそうに頭を下げてき
た。

「はい…わかりました…菊池君、今日の昼休み…ですね。」と一瞬嫌そうな顔で言つたが菊池は気づかなかつたらしい。

「それじゃあ、後でね詩乃さん！」といい自分のグループに戻つていった。

「詩乃、さつき少し嫌そうな顔してたろ？」と菊池が居なくなつたとこで言う。

「なんの事かな？あつ！ねえ蒼佑君連絡先交換しない？今流行つてるLINEで交換しよ！」と雑に話を変えてきた。

「話変えやがつたな。まあ、いいけどよ、ほい」とスマホを投げ渡す。

「え？見ていいの？」と驚いたように俺を見たがすぐ連絡先を入れて俺に返してくれた。「まああれだ…詩乃のこと信用してるからよ」と言うと「信用してるんだ…えへへ…嬉しいな」と少し頬染めながら見てきた。

そこからはたわいない話をしてるといつの間にか学校に着き

「俺は、校長室行くからここでお別れだな」と言うと「そうだね…また後でね！」と少し寂しそうにそして少し嬉しそうに言つて俺は校長室に詩乃是教室に行つた。

ん？なんでまた後で！だ？と考えて居ると校長室に着きコンコンとドアをノックして部屋に入つた。

校長室で少し話して、自分の入る教室に案内された。

俺がクラス前に着くと、少し教室がガヤガヤしていた。

耳を傾けると「今日、入学式に来てなかつた子来るらしいぜ！楽しみだな」

「うん、イケメンだといいなあ」と言う声が聞こえた。

俺は、自分では、そんなにイケメンだとは思わないが、妹にお兄ちゃんは世界一イケメンだと言われている、それが本当とは思わないが：と頭で言つてると「神無月くん入りなさい」と呼ばれた。

ガラリと扉を開けるとクラスから「おお！」と言う声が聞こえた。

そしてクラスには詩乃が居た：

「では、神無月くん自己紹介をお願い」

「はい、俺は、神無月蒼佑です。昨日まで入院していました。これからよろしくお願ひします。」と言つて指定された席に着く、ちなみに詩乃の横で後ろには菊池が居た。

後ろから「蒼佑、僕の名前は菊池翼だ！これからよろしくな！」

「お…おう翼よろしくな」と苦笑しながら言つた。

詩乃も挨拶したそうにチラチラ見ていたが意を決したように「蒼佑君おはよう」と笑顔で言われた

「霜月さんおはよう」と言うと詩乃是不服そうにこつちをジト目で見てきたが無視した。

ちなみに休み時間は、質問攻めを受けました……

それ以外は特に何も無く昼休みを迎えた

その時昼休みにあんなことになるとは、思っていなかつた：